

トゥーリストの来た道を遡る —アイルランドに渡った出稼ぎネパール人ガンダルバの事例—

森本 泉

1. はじめに

2005 年 7 月、アイルランド西部のクレア州 County Clare にある村で、ネパール人ガネシュ¹⁾（仮名）と草原で草を食む牛馬や、ぼつんぼつんと点在する家々を眺めながら丘を歩いていた時のことである。彼が白壁の家の煙突から立ち上る煙を指差して言った。

「今日はあの白い家で宴会 *bhoj* があるんだ。」

その白い家の住人と知り合いで、食事にでも呼ばれているのだろうと思いながら黙って話を聞いていると、彼は料理名を挙げていった。「豆汁 *daal*, 鶏 *kukhuraa*, 肉 *maasu*²⁾…」そして、問わず語りに、筆者が初めて彼の村を訪ねた 1996 年のダサイン *Dashain*³⁾ での思い出話を語り出した。そこでようやく、彼の目に映っている風景が、牧草地の広がるアイルランドの田園風景ではないことに気が付いた。緑に覆われた丘に白っぽく映える石造りの家々から煙が立ち上る風景を通して、彼自身の生まれ故郷、ネパール中西部ラムジュン Lamjung の風景を見ていたのだった。

筆者がガネシュやその次兄クリシュナ（仮名）と知り合って、彼らの属するジャート *jaat*⁴⁾ であるガンダルバ *Gandharba*⁵⁾ について調査を始めたのは 1996 年の春であった。彼らがネパールの首都カトマンドウのトゥーリストエリア、タメル Thamel で活動するよう

になった経緯や、彼らがトゥーリストエリアで直面する状況に—グローバル化やトゥーリズムというような現象に—いかに適応したり、折り合いをつけたっているのかということに関心があった。具体的には、彼らに特有の楽器サランギ *saarangi* を携えて村々を歩き、弾き語りを通して生活の糧を得ていたガンダルバの中にカトマンドウのトゥーリストエリアに出稼ぎに行く人々が現れるようになった過程（森本 2000a）や、出稼ぎ先のトゥーリストエリアでの適応の状況やその彼らへの影響（森本 2000b；Morimoto 2002）について明らかにしてきた。これらの作業は、今日のネパール社会に起きている現象を、トゥーリズム現象を補助線にして、明らかにすることを目指すものであった。これらの延長上にある本小論では、ガネシュとクリシュナの二人が、ネパールにおけるトゥーリズム産業の発展を背景に村からカトマンドウへと活動拠点を移し、そして国境を越えてアイルランドに出稼ぎに行くようになった過程と出稼ぎの実態を記述することを目的とする。この作業は、ネパールで近年増加している出稼ぎ現象の一端を、部分的ではあるが、二人の経験を通じて明らかにすることにもなる。

冒頭で紹介した場面には続きがある。ガネシュは 1996 年の村での思い出をひとしきり話した後に、筆者に次のように問いかけた。

「ここはネパールの村のように見えるのに、どうしてアイルランドは発展（ विकास *bikaas*）していてネパールは発展していないのか？」

初めて会った頃には想像もしなかったネパール以外の地でガネシュと再会するという場面において筆者に向けて発せられたこの問いに対し、返答に窮し言葉を濁した。彼らにとって विकासの象徴は、道路や電気に代表される社会資本であり（南 1997:318）、車道が村まで通り、電灯が灯り、外部と電話で交信できることといえる。広々とした緑の丘で牛馬がゆったりと草を食み、家々から煮炊きの煙が上がる風景の中で、アイルランドの人々はこれらの社会資本を享受している。アイルランドの田園風景と同じような風景を呈するのに、ネパールはなぜ発展していないのか。ガネシュの投げかけたこの問いに言葉を濁してしまったのは、同じ空間と時間を経験していても、両者の間にある目に見えない非対称的な関係—世界システムの中心—周辺関係—故に経験のされ方が異なる現実を説明するように迫られているかに感じられたからである。ガネシュとクリシュナがカトマンドウに出稼ぎ拠点を構え、活動していた頃、一年に1, 2度ネパールを訪れる筆者に対し、別れ際に「今度はいつネパールに来るの？」と尋ねる言葉が、その関係を象徴している。筆者が彼らを訪ねてネパールやアイルランドに行くことはできても、現時点ではその逆は考えにくい。このような状況の中、ガネシュとクリシュナはネパールを訪れた外国人観光客と懇意になり、その個人的関係によってアイルランドへの出稼ぎの機会を獲得した。いわば、ネパールに来た観光客の道を遡行するようにして彼らはアイルランドへ出稼ぎに行くことになったのである。彼らの出稼ぎの道は、世界システムの周辺から中心へと向かう。本小論では、彼らがこの構造にい

かに組み込まれ、その過程をいかに経験しているのか考察することを目的とする。

以下では、まず2章で本稿で事例として取り上げるガネシュらの属するジャート、ガンダルバの社会における位置づけを確認してから、彼らの出稼ぎの背景としてネパールにおける最近の出稼ぎ動向を概観する。次に3章ではアイルランドに出稼ぎに行くことになった経緯を、4章では彼らがアイルランドでの生活にいかに適応しているのかを明らかにし、5章でアイルランドに出稼ぎに行った二人の経験が今後の彼らにどのような将来を予想させるのか考察することでおわりにかえる。

本小論は、筆者が1996年にカトマンドウにある観光客エリア、タメルの上で土産物を買っていたガネシュやクリシュナと知合った時から今日に至るまでの観察及び聞き取り調査、それからインフォーマルなやり取りを通じて得られた資料に基づいている。観察や調査を行った場所は、本文で明らかにされていくとおり、彼らの活動場所であるカトマンドウのタメル、彼らの出身村であるヒマラヤ中間山地のラムジュン（1996年10月、1999年6月、2005年10月）、及び出稼ぎ先のアイルランド西部クレア州（2005年7月、同8月）の3地点である。

2. 研究対象の概要：出稼ぎガンダルバ

2.1 ガンダルバ

ガンダルバは、音楽を生業とするネパールのヒンドゥー的職業カーストとされる⁶⁾。ガンダルバの人口は2001年センサスによると5,887人で、ネパールの全人口に占める割合は0.03%にすぎない。ガンダルバの都市人口率は22.0%⁷⁾と他のジャートに比して比較的高いことが特徴として挙げられる。人口の多少にかかわらず、ガンダルバや他のヒンドゥー・カーストについての研究は、ヒマラ

ヤの山地民族についての研究に比べると少ないが⁸⁾、このことは、ヒマラヤにチベットのイメージが構築され、重ねられてきた過程と表裏一体をなす。

少ないながらもいくつかの先行研究を参照しながら、ガンダルバのネパール社会における位置づけを確認しておきたい。まず、ガンダルバの生態を明らかにしようとする人類学的関心に基づく研究がある。そこでは、とりわけガンダルバの生業と認識されてきた村々を歩いて歌う行為から、物乞いのイメージや社会的周縁性が強調されてきた (Macdonald 1975a ; b)。また、Höfer は、ネパールの法律ムルキ・アイン *Mulki Ain* を分析し、ガンダルバがヒンドゥー的カースト社会において体系的に最も低い不可触カーストとして位置づけられていることを示している (Höfer 1979)。この不可触としての位置づけやガンダルバの生業に由来する物乞いのネガティブなイメージは、同時に音楽がガンダルバに特有の文化として認識されていることを示唆している。このようなガンダルバの音楽は、ナショナリズムの隆盛を背景にネパールの文化として再評価され、同時に近代化などによって彼らの文化—ガンダルバ特有の楽器サランギや歌に関する技術や知識—が消滅しつつあることが危機感を持って指摘されるようになった (Chhetri 1989 ; Sharma 2003)。そしてこの危機感を共有するガンダルバ自身が、ガンダルバの住む村々を回って歌の資料を収集するようになった (Nepali 2003 等)。

このようなカースト的に不可触とされつつもネパール文化の担い手という評価は、ガンダルバのアイデンティティをアンビヴァレントなものにすることになった。たとえば、サランギ奏者として高名なラム・サラン・ネパリ *Ram Saran Nepali*⁹⁾ を悩ませた宿命論的なディレンマがその状況を示している。彼が1996年に亡くなった時、ネパール最大のヒンドゥー寺院で葬儀が執り行われ、「偉大な

芸術家を失った」として彼の死が惜しまれる様子がラジオを通して伝えられたが、ラム・サラン・ネパリは生前彼に対するこの文化的評価を素直に受け取ることができなかったのである。つまり、自身の人生を「素晴らしい音楽家として尊敬されようとするだけで、ガイネ・アイデンティティ故に人々に辱められ、蔑まれることになる」からであった。音楽家としてのアイデンティティを持とうとすると不可触カーストとしての扱いを受けることが不可避となる困難な状況を、自分の宿命 *mero karma* という歌の中で切々と訴えていた (Weisethaunet 1997 ; 1998)。

ガンダルバがみなラム・サラン・ネパリのようサランギ奏者として高く評価されているわけではなく、歌で名を成すのはごく一部のガンダルバにすぎない。彼らの多くは村々を歩き、人々の要望に応じて歌を作り、弾き語ってきた。他の職業カーストの人々と同様に土地等の生産手段を持たない彼らは、マーケットの動向にあわせて、機敏に、かつ柔軟に活動を変容させてきた (Hitchcock 1975)。筆者のガンダルバについての関心は、Hitchcock が指摘するガンダルバの社会変化に対応した機敏さや柔軟性にあり、このような関心に基づく本小論での試みは、二人の国境を越える出稼ぎをめぐって、その空間的な移動過程における彼らの適応を明らかにしようとするものである。

先述したが、筆者は彼らが村からカトマンドウの観光客エリアに出稼ぎに来るようになった経緯や、そこでの適応の状況を明らかにしてきた。その過程で、彼らにとって生計を立てる道具であった楽器のサランギが土産物として売られるようになっていった。サランギに商品としての価値が見出されるようになると、それまで自身が弾くために作るか、作ってもらうかしていたシンプルなサランギに彫り込みを入れて装飾的にしたり、持ち運びしやすいようにサイズを小さくしたり

するようになった。一方、村でネパール人を対象に歌っていたような歌はトゥーリストエリアで外国人トゥーリスト相手に歌われることは殆どなくなり、その代わりにネパールで流行っているフォークミュージックが歌われるようになった。この変化の過程で、タメルのガンダルバは、Weisethaunet が指摘したラム・サラン・ネパリの宿命論的なディレンマを内在してしまう楽師カーストであるガイネとしてのアイデンティティではなく、ネパールの伝統的な音楽家 *traditional musician* ガンダルバとしてのアイデンティティを確立している (Morimoto 2002)。その変化が生じた背景には、トゥーリスト空間として創出されたタメルが、外国人トゥーリストだけでなく、ネパールや隣接するチベット、インドからも企業家らがトゥーリズム産業に参入する為に集まり、人口の流出入が激しく、匿名性の高い地域となっていることが挙げられる。また、トゥーリズム産業やその活動が集積する過程でタメルが経済的にも文化的にもグローバル化の浸透した地域となり、そこではヒンドゥー的な社会的価値観よりも資本主義的価値観が卓越するような状況があることも指摘できる (Morimoto 2007)。

1970 年代から 1980 年代にかけてカトマンドゥで活動するようになったガンダルバたちは、経済的社会的理由によって教育を全く受けていないか、受けていても数年間学校に通っただけで中退している。その一方で、幼少期に親類縁者の年長男性について村々を歩き、サランギの弾き語りに直に接していた。その過程で彼らはサランギを弾き、歌う技術を身につけてきた。1980 年代初頭はカトマンドゥで活動をするといってもタメルではなく、人の集まるバスパーク等でネパール人を対象に歌っていた。やがてラムジュンやその周辺に住む若いガンダルバたちが、タメルを拠点に活動するようになる。村で待つ家族にとっては、ガンダルバの男性たちがカトマン

ドゥを拠点に活動を始める以前から彼らが村を時々離れて不在であることに変わりはない。しかし、彼らの音楽実践の対象がネパール人から外国人トゥーリストに変わることで彼らの収入は増加し、その結果村の家を増改築したり、子供たちをより長く就学させたりするようになった。具体的には、路上で外国人トゥーリストに彼らの楽器であるサランギを土産物として売ったり、レストランやホテルで楽器を弾くアルバイトをしたりすることで、生計を立てるガンダルバが増えてきた。

このような変化に別の変化が加わるようになったのは 1990 年代が終わる頃からである。ガンダルバたちはタメルに留まっておらず、やがて外国に出稼ぎに行くようになった¹⁰⁾。1996 年の時点で、日常的にタメルに関わっていたインフォーマント 30 名¹¹⁾のうち、2007 年の夏の時点で外国に行った経験のあるガンダルバは 11 人であり、4 人が外国へ出稼ぎに行っており不在であった。1997 年以降にタメルで活動するようになったガンダルバを含めると外国に行った経験のある人数は更に増える。このような状況は、近年国外への出稼ぎが増大しているネパールの側面を示すものと言える。もちろん、このような傾向を一般化することは避けなければならないし、出稼ぎを推進する背景に国の政策やマンパワー・ビジネスの存在を看過できない。しかし、これから述べるガンダルバの外国経験のように外国人との個人的な関係を頼って外国に渡るケースは、筆者の経験的観察からタメルにおいて一トゥーリズムに関わる人々にとって一多いとはいえなくても、珍しくないものといえる。

2.2 国外への出稼ぎの背景

ガネシュとクリシュナが初めてアイルランドに渡ったのは 1999 年 7 月のことだった。3 ヶ月間の演奏旅行の予定でアイルランドを

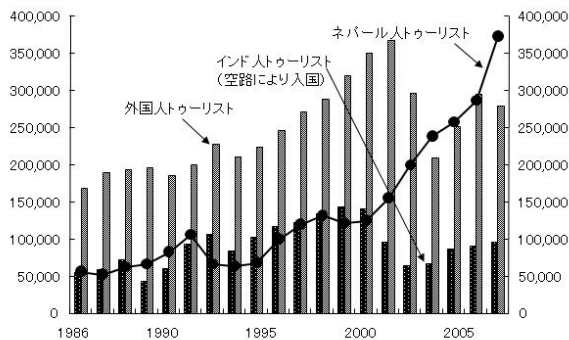


図1 ネパールを訪れる外国人観光客数と
外国に渡航するネパール人数の推移

Nepal Tourism Statistics 2005 より作成

訪れ、ネパールの歌を紹介してきた。一度帰国してから、彼らが定期的にアイルランドに出稼ぎに行くようになったのは2000年以降であり、ネパール全体でも国境を越えるネパール人が増加した時期に相当する(図1)。その背景に、1996年に始まった毛沢東主義派 *Maoist* の活動があり、政情不安が加速されたことがある。また、2001年にネパール王室で当時のビレンドラ Birendra 国王と王妃、皇太子を含む10数人の王族が亡くなる事件が起こり、その後王位に即位した次弟ギャネンドラ Gyanendra が非常事態宣言を発した前後数年間で、ネパールを訪れる観光客は激減した(図1)。

この間、基幹産業に位置付けられてきた観光産業はもとより、その他の産業も低迷するようになった。この事態を打開するために、ネパール政府は韓国やマレーシアへの出稼ぎ労働を制度化する等、積極的に国外に雇用機会を求めるようになった。こうして外国に出るネパール人の人数は2000年以降ますます増加し、2004年にはネパールを訪れる外国人人数(インド人をのぞく)を上回った。ガネシュやクリシュナの出稼ぎはこのような状況を背景に始まったのである。

図1が示す出国するネパール人の増加に出稼ぎ目的の出国者がどのくらい含まれるかは不明である。しかしながら、図2が示すネ

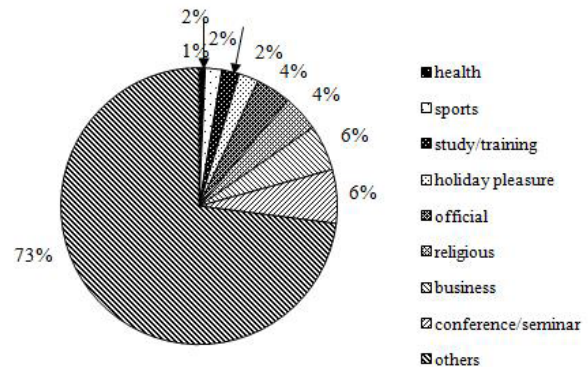


図2 目的別外国渡航ネパール人割合(2005年)

Nepal Tourism Statistics 2005 より作成

パール人の出国目的別渡航者割合を見てみると、出稼ぎに該当する項目がないので推測するしかないが、全体で373,362人のうち74%(272,515人)を占める「その他」に含まれるものと考えられる。この「その他」の割合は年々増加している。

行き先をみると、アラブ首長国連邦へ渡航する人数は68,283人(18%)、空路によるインドへ57,400人(15%)¹²⁾、その次がマレーシアで35,384人(9%)となっている(Ministry of Culture, Tourism and Civil Aviation 2006)。これらのことから、インドやアラブ首長国連邦、及びマレーシア等の非先進国への出稼ぎが多いと推測される。他方ガネシュとクリシュナの出稼ぎ先であるアイルランドに渡航するネパール人は「その他」に含まれ人数は不明であるが、近年留学や就労目的の渡航者数が増加している隣国のイギリスでもおよそ6,957人(2.6%) (Ministry of Culture, Tourism and Civil Aviation 2006) が渡航しているにすぎないことから、アイルランドは渡航先としてはもとより、出稼ぎ先として多くはない事例と言える。

3. 観光客の来た道を逆行する

：世界システムの周辺から中心への旅

ガネシュとその兄クリシュナがアイルラン

ドを訪れることになったのは、タメルで知り合ったアイルランド人観光客が彼らの演奏旅行を企画してくれたからである。このような外国人との個人的関係を通して外国を訪れるケースは、先述したように観光客エリア、タメルにおいて珍しくないし、観光現象の一部分といえる。ガネシュとクリシュナは演奏旅行を機に、今度は就労目的でアイルランドに定期的に行くようになった。この現象は、第三世界に向かう先進国からの観光客の流れの逆、つまり世界システムの周辺から中心に向かう流れを構成する。本章では、ガネシュとクリシュナの村からアイルランドに行くことになった経緯を辿ることにする。

3.1 村からカトマンドウへ

1965年、ラムジュンに生まれたクリシュナは、末弟ガネシュの次兄であり、他に兄が二人と妹が一人いた。5人きょうだいの中でクリシュナだけが学校に通った経験がある。他のきょうだいよりも賢かったから父親が通わせてくれたとクリシュナはその理由を語る。4クラスに在籍していた時に父親が亡くなって生活が困窮し、母親が物乞いをしながら子供たちを育ててくれたという。クリシュナは父が亡くなると学校をやめ、親戚の年長男性と共にサラングを携えて村々を歩くようになった。遠くは国境を越えてインド¹³⁾まで、年長者について村を回って歌を歌い、その報酬として米やトウモロコシ等を受け取るようになった。バスの運転手は「我々貧しいガンダルバ」を見ると代金をとらずにバスに乗せてくれたものだったとクリシュナはその当時を語る。クリシュナは村を歩いていた頃の思い出として、ヒンドゥー・カーストの村ではヒンドゥー的な文化規範の中で下位カーストとして露骨に扱われ、ひどい思いをしたこと、対照的にチベット・ビルマ語系の民族の村で気前良く肉や酒を振舞われ、村の娘

達と歌のやり取りをしたり、恋仲になったりして楽しい思いをしたことを語る。どこの村の人々が何を食べさせてくれるのか、飲ませてくれるのか、娘達の気立てが良いか、歓迎されるか、気前がいいかというような情報が仲間内で交わされ共有される。クリシュナはカトマンドウに行くまでの5,6年間、村々を歩く経験をしていたことから、ネパールとその周辺の地誌に詳しい。また、クリシュナの村々を歩く生活は、サラングを弾き、歌う技術を身につける期間でもあった。

ある時、ラジオ・ネパールに雇われてサラングを弾いていたガンダルバがカトマンドウから「良い服」を着て村に戻ってきた。クリシュナはその彼に憧れて友人とカトマンドウに行こうと思い立った。そして、1981年にカトマンドウを初めて訪れた。カトマンドウで活動をするようになって、当初は村を歩いていた時と同じように、バスパークのような人の集まる場所でサラングを弾き、歌っていた。サラングを持っていれば、「バイ *bhaai*¹⁴⁾、金をあげるから歌を歌って」とネパール人に声をかけられ、歌うと数ルピーから数十ルピー¹⁵⁾が歌の報酬として渡された。このような活動が変わることになった経緯について、クリシュナの語りを要約すると次のようになる。

カトマンドウで人の家の軒先を借りて寝かせてもらいながら、サラングを弾いて歌って細々とお金を稼いでいたところ、そこの人に「都会 *sahar*¹⁶⁾に行ってごらん。都会には外国人がいるし、金を稼げるよ」と言われ、都会に行くことにした。そこで行き着いたのが外国人が多く集まってくる観光客エリア、タメルであった。タメルでサラングを弾いていると、フランス人らしい外国人がサラングに興味を持った。周囲のネパール人に「サラングを売ってあげなさい」と言われてサラングを渡したところ、100Rs.を貰った。当時、サラングはサラングを弾ける人に無料で渡す

ものであったのが、外国人に渡したら「大金」を渡された。村で 100Rs. といったら「大金」でなかなか稼げるものではない。この時に外国人にサランギを売ることを知り、カトマンドウに住んでいたガンダルバからサランギを買って外国人に売り、一度に 2,000Rs. を稼ぎ、それを村の母親に持ち帰ったらとても喜んでくれた。

村人達もクリシュナがどうやって金を稼いだのかを聞いて、次々とカトマンドウに行くようになった。また、この一件が評判になってクリシュナに縁談が来た。その頃、村でサランギを弾いている時に会ってお互い好意を寄せ合ったものの叶わぬ恋だと諦めた他のジャートの娘が結婚したという噂を聞き、感傷的になっていたクリシュナは、母が勧めるその縁談の女性と結婚することにした。その妻との間に現在三男一女がいる。

村々を歩いてサランギを弾いていたガネシュが兄クリシュナを頼ってカトマンドウに出稼ぎに行くようになったのは 1988 年、ガネシュが 20 歳の時であった。

3.2 カトマンドウでの生活

ネパールにおいて 1990 年に民主化が達成されると、1980 年代から基幹産業に位置づけられてきたツーリズム産業が経済の自由化に伴って、周辺的な経済活動も含めて、急速に展開するようになった。このようなネパールの状況を背景に、経済機会を求めてネパールを歩いてきたクリシュナらが、ネパール人一人当たりの GDP の年間平均額を数日で使い切ってしまう外国人を活動の対象として見出したことは不思議ではない。先述した出来事が契機となって、サランギを外国人に売ることが彼らのカトマンドウでの仕事となっていき、クリシュナは 1980 年代からツーリストエリアとして展開するようになったタメルに活動拠点を移すようになった。ツーリズムの展開と共に、クリシュナ

らの活動対象はネパール人から外国人ツーリストに移っていった。

この過程において、ヒンドゥー的カースト規範による社会的周縁性故にガンダルバの諸機会へのアクセスが制限される反面、文化的な禁忌が少なかったことが、新興産業であるツーリズムへの参入を容易にしたと言える。つまり、ヒンドゥー的カースト社会の下位に位置づけられてきたガンダルバは、ジェンダー差はあるにしても、浄不浄の観念から忌避すべき外国人との接触に抵抗が相対的に小さかったといえる。こうして、旅の吟遊詩人と称されたサランギを弾くガンダルバから、路上で外国人ツーリストを相手にサランギをネパールの土産物として売ったり、弾いたりするようになったことで一彼らの言葉を借りると「ビジネス」をすることで一、彼らの生活は大きく変わっていった。

彼らのカトマンドウでの生活は次のようである。地縁血縁の仲間同士でタメルやその近くに部屋を借りて住むようになり、カトマンドウに「ビジネス」に来るガンダルバが増加するようになって暫くすると、Gandharba Culture and Art Organization が設立された。1995 年にこの協会は設立されたのだが、その背景にタメルに常宿していたアメリカ人のクリシュナに対する個人的な支援があった。タメルの路上で日常的に「ビジネス」をしていたガンダルバはその当時 30 人近くおり、その中で最古参の一人であるクリシュナは社交的で人あたりがよく、外国人の友人が多かった。そのアメリカ人も、彼がディディ *didii*¹⁷⁾ と呼んで慕う友人の一人であった。この協会の事務所としてタメルに部屋を借り、ガンダルバたちはタメルの路上での「ビジネス」に疲れるとそこに集まり、お喋りに興じたり、寛いだりする。また、近年増加した文化イベントへの参加要請も、その協会を通してくるようになり、タメルのガンダルバの活動は協会を拠点に、場当たりの出演者を決

めることがあっても、ある程度組織化されるようになった。

1990年代後半になると、ある程度の学校教育を受けた若いガンダルバたちがタメルに集まるようになる。父親の世代が子供たちに夢を託して学校教育期間はサランギを触らせなかったため、タメルに来てからサランギの弾き方を年長者から習い、ネパールのフォークソングを弾きながら路上を歩くようになった。若いガンダルバの中には、ガンダルバ特有の歌い方は上手くできないが、近年都市部で急増している歌垣¹⁸⁾ ドーリ *dohorii* のステージがあるドーリ・レストラン *dohorii restaurant* で、歌う技術を身につけた者もいる。

2000年まで、ネパールを訪れる外国人観光客（インド人以外）は右肩上がりに増加していた（図1）。観光客を対象に路上でサランギを売ったり、レストランでフォークソングを弾いたりするだけでなく、先述したように各種イベントにガンダルバとして招かれることも増えてきた。このことは、民主化以降急速に浸透してきたグローバル化の波に晒され、高揚するようになったネパールのナショナリズムと無関係ではないであろう。他方で、村を歩いていた頃は、日々サランギを弾き、歌っていたのが、タメルに来てから歌を歌うように請われることも減多になくなり、歌を忘れるようになっていった。

タメルでの「ビジネス」活動は、クリシュナらに別の人生の可能性を見出させることになった（Morimoto 2002）。村々を歩いていた頃、楽師カースト即ち下位カーストであることから差別的な扱いを受けてきた状況とは違って、外国人に楽師カーストや下位カーストという社会的属性を明かしたとしても、共感を示されることはあっても、また心づけがはずまれることがあっても、ヒンドゥー的な差別的な扱いを受けるような状況には殆どならない。ネパールの観光客・イメージ

が重ねられるタメルにおいて、外国人にとってはガンダルバも外国人の思うネパール人—後述するがチベット文化圏をも含む広い意味でのアジア人—でしかない。ネパールやその人々に重ねられる他者イメージはクリシュナやガネシュの自己イメージとは異なる。タメルでは、先述したサランギ奏者として評価されたいと思うと下位カーストであるガイネの扱いを受けてしまうというアンビヴァレントな思いを抱えて亡くなったラム・サラン・ネパリの人生とは別の、サランギにアイデンティティを示しても一たとえサランギを弾けなくても一下位カーストとして屈辱的な扱いを受けることなく、ネパールの伝統的音楽家 *traditional musician* として評価されるような人生の可能性を実現可能なものとして夢見ることが可能なのだ。

3.3 国境を越える：アイルランドへ

クリシュナやガネシュは、アイルランドに出稼ぎに行く前まで、他のガンダルバと同様にタメルの路上で観光客にサランギを売ったり、夜になると外国人が食事に来るレストランでネパールのフォークソングを歌ったりしていた。また、協会の事務所で外国人にサランギ等の楽器演奏の手ほどきをしたり、トレッキングに行く外国人に同行者として付き添ったりすることも、彼らの活動に含まれる。いずれも安定した活動とはいえないが、外国人対象の経済活動であることから、他の職種に比べると一度に手にする実入りは小さくない。タメルで活動する以前、村を歩いていた頃は、歌の報酬として粃や米、トウモロコシ、それに数十ルピーの現金を手にしていったのが、タメルではサランギ一台が数百ルピーから数千ルピーで売れ、場合によってはUSドルや日本円等の外貨を代金として受け取ることもある。

彼らがタメルで手に入れるようになったのは経済機会ばかりではない。例えば、外国人

トウーリストの同伴者として一場合によってはボーイフレンドとしてネパール国内外の旅行に同行し、外国人と同じようなトウーリストとしての経験をする機会を手にするガンダルバもいる。ネパール人にとって、一般にインド以外の外国に国境を越えて出かけることは経済的政治的に容易ではない状況を見ると、ましてヒンドゥー的カースト社会において諸機会から遠ざけられてきた彼らにとって、外国渡航の機会は、その実現可能性がいかに低くとも、大きな魅力となっている。日帰りの市内観光から長ければ一ヶ月のトレッキングや外国旅行に同行し、帰ってきたら心づけやプレゼントを貰い、その後メールや手紙のやり取りをしたりする。また、外国人と付き合う機会があること自体一街中で聞かれるのとは違うエキゾチックな雰囲気音楽が流れるトウーリスト・スタンダードのレストランに招かれて共にテーブルを囲み、ビールを飲んだりピザを食べたりすることも一彼らにとってタメルが煌いて見える要因になっている。このように、ネパールのヒンドゥー的社会で周縁化された存在としてではなく、他のネパール人と同様に、戦略的に下位カーストであることを語る場合はそれ以上に、諸機会を獲得することが可能な環境がタメルにあった。この意味で、タメルは、ネパールのヒンドゥー的な社会に埋め込まれたガンダルバを切り離し、グローバルな世界システムにネパール人として組み込むインターフェイスのような役割を果たしているといえよう。

先述したが、人当たりの良いクリシュナは他のガンダルバに比べてより多くの外国人トウーリストを友達にもっていた。クリシュナらのアイルランドへの演奏旅行を企画したアイルランド人も、彼がタメルで出会った外国人の一人である。アイルランドに戻ったクリシュナの友人は、クリシュナとガネシュ、及び彼らの姻戚関係にあたるガンダルバの3人のアイルランド渡航手続きに必要なビザ申

請の為の書類や、航空券や海外旅行保険の為の経費を送ってきた。クリシュナとガネシュはアイルランド行きが決定すると、母親のいるラムジュンの村に親類縁者に挨拶をしに戻った。その旅に同行した筆者は、入国審査時に署名をするために、ガネシュと木切れで地面に名前を書く練習をした。他方のクリシュナは学校に通った経験があり自身の名前は時間をかければ以前から書くことが出来たが、アイルランドから手続きに関する手紙やメールが来ると知人に読んでもらい、どのように返事を書くべきか相談して、返事を書いて出してもらっていた¹⁹⁾。海外旅行保険のかけ方から所持品の持ち方まで周りに相談しながら準備を進め、1999年7月、カトマンズの空港でタメルのガンダルバや村から見送りに来た親類縁者、友人に見送られて、3人は旅立っていった。アイルランドではタメルで出会った友人の案内で学校やパブ、人の集まる場所でサランギを弾いて、約3ヶ月の演奏旅行を終えて帰国した。

4. アイルランドでの生活

2000年以降、クリシュナとガネシュはアイルランド西部、大西洋に面したクレア州にある人口1,000人ほどの村で働くようになった。アイルランドは他のヨーロッパ諸国に比べて経済成長が低迷していたが、1990年代にEUに統合された事もあり、急成長を遂げた。近年では新たにEUに統合された東欧諸国、特にポーランドからの移民労働者を多く受け入れるようになった。彼らが働く村は、湧き出る鉱泉水と年に一度のマッチメイキング・フェスティバルで有名な観光地で、9月頃になるとヨーロッパをはじめとした外国からのトウーリストで賑わい、繁忙期にはポーランド等から出稼ぎ労働者が来る。また、アイルランド西部はアイルランド音楽が継承されてきた地域として有名であるが、とりわけ



写真1 パブのカウンターに立つ
クリシュナとガネシュ

クリシュナとガネシュのいる村は音楽活動が盛んなことで知られ、音楽家達の演奏を楽しむ機会が多い。閑散期の春になるとネパールに戻り、約3ヶ月間をカトマンドウや村で過ごす。本章ではこのようなクリシュナとガネシュのアイランドでの出稼ぎ生活をめぐって、彼らについて生じている変化を見ていくことにする。

4.1 出稼ぎをめぐって

クリシュナの出稼ぎ先は一世紀半続いているパブである(写真1)。ホールを行き来して給仕をしたり、厨房で細々とした雑用をしたり、近所の店まで買い出しに行ったりする。開店する昼前から閉店する夜中2時頃まで給仕として働くが、夜になって音楽家たちが集まると時々演奏に参加し、サランギを弾くこともある。他方、ガネシュは2000年に来た時に紹介されたホテルで働いたが、仕事をうまくこなせず一旦ネパールに帰国した。クリシュナがパブの経営者に就労機会の斡旋を頼み、1995年に開業した鮭を燻製にするスモークハウスで働けることになり、再びアイランドに来ることになった。ガネシュは朝から夕方までスモークハウスで働き、夜になるとパブでクリシュナの手伝いをする。二人ともパブの二階にそれぞれ一室ずつ部屋を与えられ、食事はパブの賄いで食べる。クリス

マスシーズンが近づいてスモークハウスが繁忙期になると、他方パブは冬期には閑散としてくるので、クリシュナはスモークハウスの手伝いをする。

パブの経営者は最初にクリシュナやガネシュらをアイランドに行くきっかけをつくったアイランド人の知人で、最初の訪問時からの知り合いである。繁忙期の夏期には東欧からの出稼ぎ労働者を雇用する。その多くがポーランド出身の若い男女で、二人と同じくパブの二階にある部屋に住み、パブの賄で食事をする。彼／女らには給料として一週間400ユーロ(当時の換算率で約55,000円)が支払われるという。他方二人は春から冬までおよそ9ヶ月間働き、ネパールに戻る際にそれぞれ住居費や食費、航空券代、ビザ経費を差し引いたネパール・ルピーにして約40万ルピー(当時の換算率で約68万円)が一度に支払われる。2006年の春は、胆石になったクリシュナの医療費が引かれた為にネパールに帰る際にそれぞれ2000ユーロ(約27万円)が雇用者から渡された。クリシュナは東欧出身者との待遇の違いについて、「自分達はヨーロッパの人より安く働かされて、しかも時間外にも働かされている。でもネパールにいるよりはまし。ネパールではこんなに稼げないから」と語る。

このような出稼ぎ労働者の中で周縁化されている状況にいかに対応しようとしているのだろうか。クリシュナは人に言われたことを断ることができずに仕事が増えていつも時間に追われ、かつてネパールでは腕時計をしていても時間を気にしなかったクリシュナが頻繁に時計に眼をやるようになった。他方のガネシュは、兄が忙しければパブの仕事を手伝うが、「他人の言いなりになると見下されるから労働時間外は仕事を頼まれても断る」という。アイランドでは特別な出費がなければ月額で一人7万5千円を稼いでいることになり、ネパールで彼らが一ヶ月にこれだけの

収入を継続して得ることは考えにくい。タメル路上の不安定な「ビジネス」では一度に「大金」を手にする可能性はあるが、それは決して継続されるものではないことを彼らは心得ている。クリシュナとガネシュはポーランド出身者達と待遇が異なることに対して不満を感じているが、「ネパールにいるよりはまし」であると受容し、アイルランドの村で周縁化されている状況は今のところ仕事を辞める理由となっていない。

他方、彼らにとってネパールでは想像していなかった経験もある。例えば、パブでの給仕やスモークサーモンの製造のように他人に食事を提供する仕事は、ネパールの一般的なヒンドゥー的カースト社会において下位カーストに位置づけられてきたガンダルバには近づけない領域であった²⁰⁾。クリシュナとガネシュは自分の作る料理やスモークサーモンを世界中の人が食べていると胸を張って語る。この経験も、クリシュナやガネシュにとってまた別の人生を実感させていると言えよう。休みの日にはアイルランド人の友人達と釣りをしたり、音楽演奏に出かけて臨時収入を稼いだりしているが、これらの活動は、ネパールにいた時にも行っていた活動の延長上に位置づけられている。しかし、アイルランドの路上でサラングを弾けば一日で200－300ユーロ（当時の換算率で約2.7－3.7万円）を稼ぎ出すこともあったというように、その意味は同じとはいえない。

さて、彼らがこうしてアイルランドで働くようになってからネパールではどのような変化が起きているのだろうか。彼らの村、ラムジュンでは、彼らがカトマンドウに出稼ぎに行くようになってから、クリシュナの一階建ての石造りの家が二階建てのセメントの家に増改築され、アイルランドに出稼ぎに行くようになって数年後の春にはバスルームとトイレが設置された。村にはそれまでバスルームはもとよりトイレがなかったが、彼らは家の

近くにセメント造りの小屋を新しく建て、屋根の上に黒い貯水タンクを乗せ、屋内で水浴びができる施設を建造した。但し、2005年の秋に筆者がラムジュンの村を訪れた時には施錠されており、日常的には利用されていなかった。村の家は増改築されたり、整備されたりしたが、クリシュナとガネシュの家族は彼らがアイルランドに行くようになってから程なくカトマンドウに部屋を借りて住むようになり、留守宅は親族が住むか、施錠して留守のまま置かれている。

彼らのように外国に出稼ぎに行くネパール人はラフレ *lahure*²¹⁾ と呼ばれ、数年するとカトマンドウに土地を買って家を建てるのが期待される。彼らもカトマンドウに土地を買おうとしたものの一度は騙され、2007年の春にようやく兄弟で購入することができた。既に数人のガンダルバが、外国での出稼ぎ等で蓄財し、カトマンドウに土地を買って家を建てており、クリシュナらの次の目標は、他のラフレと同様、カトマンドウに家を建てることである。

アイルランドでの出稼ぎ生活の中で、彼ら自身にはどのような変化が見られるのだろうか。クリシュナは、ネパールではトゥーリストと共に酒を飲み、タバコを吸い、肉を好んで食べていたのが、アイルランドに来てから医者勧めに従って禁煙禁酒した。更に胆石症や糖尿病と診断されてから野菜中心の食事—ジャガイモが中心であるが—を心掛け、運動のために毎日散歩をするようになった。ネパールの村では、体に不調があるとその原因を取り巻く環境全体から説明し、超自然な力で解決しようとしていたが、アイルランドでは体の部位と自身の生活を関連付けて不調の原因を理解し—なんらかの因果関係によって悪霊等が憑依したのではなく—、本人自身の問題として解決しようとしている²²⁾。そして、当時ロンドンにいた筆者に、定期的に受ける血液検査の結果等を英語とネパール語を

混ぜてアルファベットでメールを書き、携帯電話から送ってくるようになった。1996年に会った頃は黒電話の受話器のどこに向かって喋ればいいのか尋ねていたクリシュナが、携帯電話から国際電話をかけ、メールを送るようになっていた。現在ではカトマンドウでも携帯電話の保有者数が急増し、メールも頻繁に交わされるようになったので、カトマンドウにいても早晚携帯電話を駆使するようになったであろうが、アイルランドでの生活の中で適応した結果といえる。また、1999年にラムジュンで地面にアルファベットで名前を書く練習をしていたガネシュが、2005年にアイルランドで再会した時に、アイルランドに来てから練習したというアルファベットが書き連ねてあるノートを示し、そこにボールペンで彼自身の名前と妻の名前を書いて見せてくれた。そして、次は彼らが自称するガンダルバと彼の子供達の名前を書きたいと語る。個人差もあるだろうが、クリシュナとガネシュの文字の読み書きに関する差異に、初等教育を受けたか否かの違いが反映されていると言えよう。

4.2 アイデンティティの表象と実践

先述したように、パブでは地元の音楽家達が演奏しているところにクリシュナがサランギを（写真2）、ガネシュがネパールの両面太鼓であるマール *maadal* を合わせることもある。2004年にクリシュナとガネシュはそのパブの音楽仲間達とネパールのフォークソングを収録した *Gandharba & the Roadside All-Stars* という音楽CDをリリースした。CDの解説書に、アイルランドの吟遊詩人 *bard* になぞらえて、ネパールの吟遊詩人カーストとしてガンダルバが紹介され、ニュースを広めることから昔の戦記物語を伝えることまで、いくつもの物語を歌に織り込んで受け継いできたと説明されている。そのCDにおさめられているのは、クリシュナらが働いている村



写真2 パブでサランギを弾くクリシュナ

やその周辺の音楽家達との合奏で、サランギとマールに加えて、バウローン（片面太鼓）やフルート、フィドル、バグパイプのようなユイリーン・パイプ、アコーディオン、ギター、口琴等がある²³⁾。例えば1953年にガンダルバが歌ったエヴェレスト初登頂を果たしたテンジン・ノルゲイ・シェルパ Tensing Sherpa（ママ：筆者注）の歌が途中からクリスマス・イヴ Christmas Eve という名のアイルランド民謡に変わる曲が収められている。弾き語り調のゆっくりしたガンダルバの曲が、ダンス向きのアップテンポの曲に移行していくのだが、クリシュナのサランギもそれに伴ってアップテンポになっていく。ガンダルバの中で古くから継承されてきた歌も年長者の演奏を聞いて覚えてきたし、カトマンドウでネパールのフォークソングを弾くようになったクリシュナやガネシュにとって、アイルランドで現地のフォークソングを彼らの楽器で演奏することは、これまでの実践の延長上にあるといえよう。

先に触れたが、彼らが1999年に初めてアイルランドを訪れた時に人の集まる屋外でも演奏したことがあった。この行為も彼らがネパールで村やバスパークで弾き語りをしてきたことの延長上にあるといえる。違いはア

イルランドでは見慣れない楽器を奏でる茶褐色の肌をした人の音楽を、地元のフォークミュージックに馴染んだ白人が聴衆として楽しんでいるということで、その聴衆によって彼らの演奏や風貌に好奇の眼が向けられ、ネパールの村では考えられない金額の報酬が与えられることであった。

アイルランドにおけるクリシュナとガネシュの音楽に関する実践は、彼らの経済活動の余興的な活動に位置づけられるかもしれないが、彼らがネパールでしてきた実践の延長上にあると考えられる。主たる経済活動がそれぞれパブの給仕であり、スモークハウスの工場労働者であることから、ネパールにいた時よりもサランギに触れたり歌ったりする時間は短いし、歌を忘れつつあるが、音楽に対するアイデンティティを確認する—各種書類の職業欄に音楽家 musician と記すような—機会は増えている。そして、ガンダルバの歌を忘れる一方で、アイルランド民謡に合わせてサランギを奏でるようになった。ネパールにいる時は恣意的にサランギを隠すことで出自を特定できないようにすることもあったが（森本 2000b）、アイルランドでは音楽を実践する時間や機会が減っても、音楽家としてのアイデンティティを敢えて隠すようなことはしない。

他方で、ネパール人としてのアイデンティティに更にアジアに対するアイデンティティが重層的に重ねられてきた。彼らはアイルランド西部だけでなく演奏旅行でダブリンやイギリス、フランスを訪れることがあるのだが、ある時フランスの新聞記事に掲載されたサランギを演奏する彼らの写真のキャプションに「チベット文化」と記されていた。これについて、クリシュナは、隣でチベット文化の展示をしていたから間違えたのだらうと分析するが、ネパールの雑誌に、サランギを弾きながら歩く彼らの写真に「ガイネ」とキャプションを付けられた時のような不快感は示さな

い。そこにオリエンタリズム的なまなざしが含まれていても、チベット仏教とヒンドゥーが混同されていても、クリシュナにとって、ヒンドゥー的なカースト規範による差別的な扱いの方が大きな違和感として認識されるのだろう。ラム・サラン・ネパリの、サランギ奏者でありたいが下位カーストとしての扱いを忌避したいという宿命論的なディレンマを、クリシュナはまずはカトマンドウのタメルで、次に国境を越えることによって、必ずしも音楽家であることを実践せずにアイデンティティを維持しつつ、克服していると言える。しかしながら、その一方でヒンドゥーやネパールまでもが、他者によってチベット等と誤認されるような、更に大きな構造—グローバルな世界システム—に組み込まれていることは看過できない。

5. おわりにかえて

カトマンドウのトゥーリストエリア、タメルでサランギを土産物として売ったり、レストランやホテルで歌ったりすることを通して、クリシュナとガネシュは従来の差別の対象であるガイネとは異なる音楽家としてのアイデンティティーネパールを訪れる外国人にとってネパールの伝統を継承する、あるいは実践する音楽家としてのアイデンティティーを維持することが可能であった（Morimoto 2002）。そして、アイルランドでクリシュナとガネシュはまた、サランギやマーダルを手に取り、アイルランドの音楽家達と共に、人に請われれば音楽を奏でるようになった。行為だけを取り出せば、タメルで行っていた実践の延長上に位置づけられるかもしれない。しかしながら、この過程はネパールにいた時よりももっと直接に、彼らを世界経済の中心—周辺関係において周縁化するものだったと言える。つまり、タメルで生計を立てることができなくなれば村に戻って経済機会を獲得

することが、金額の多少はあれ可能であったが²⁴⁾、アイルランドに来たらビザの問題があるためにまずは保証人の庇護下に入り、働くことになる。他の出稼ぎ移民労働者との差別待遇に不満を感じても、彼らには、ネパールに戻る以外の選択肢は殆ど用意されていない。

再び冒頭のガネシュの言葉に戻ろう。ここはネパールの村のように見えるのに、どうしてアイルランドは発展（ビカス *bikaas*）してネパールは発展していないのか？アイルランドの田園風景を通してネパールの村を見ていたガネシュのまなざしを反転させると、アイルランド人観光客がネパールのガネシュの村を訪れ、そこにアイルランドの田園風景を重ねて懐かしむような、進化論的な読みがなされることは想像に難くない。この時、なぜネパールが発展していないのかとアイルランド人観光客が疑問を呈することは考えにくい。ガネシュが意識するしないにかかわらず違和感を抱く世界システムの中心—周辺構造は、それぞれの出身地によって同じ風景でも違うものとして映し出す背景となる。アイルランドに出稼ぎに行った彼らは、前景としてのアイルランドの田園風景にネパールの村の風景を重ね、望郷の念を抱く。そして村の家を増改築し、投資をする。しかしながら、彼らは村に戻って生活するのだろうか。村を想って投資はするが、それは近い将来自身の村を訪ねてくるであろうアイルランド人をはじめとした外国人の友人の為であり、実際に彼らの近い将来の生活拠点として投資しているのはカトマンドウなのである。

引き裂かれた出稼ぎ民の世界—出身の村と出稼ぎ先の都市—をいかにうまく繋ぎ、生きているのか、松田素二がアフリカの都市について描いた出稼ぎ民の世界は（松田 1996）、本小論で紹介したクリシュナとガネシュの状況にも部分的に該当する。もともと村から村へと歩いていた彼らがやがてネパールの首都

カトマンドウに行き着き、そこでネパール人を相手に歌う報酬として僅かな金品を受け取ることから、外国人に楽器や歌を売ようになり、それまでの生活から想像もできなかったような生活を夢見られるようになった。そして、実際に夢見た外国—南アジア世界ではない先進国—での生活を経験するようになる。この過程において、彼らの望郷のまなざしの先には、彼らの夢を実現する機会を得ることになったカトマンドウのタメルではなく、生まれ育った村に向けられている。

ヒンドゥー的カースト規範に規定された社会的周縁性により、ガンダルバはネパール社会において困難な状況に置かれてきた。諸機会へのアクセスが制限され、教育機会も十分に与えられなかった彼らが、近代化の過程で安定した職に就くことは非常に少なかった。しかしながら、村からカトマンドウへ活動拠点を移し、ネパール人から外国人に彼らの活動対象を変えることにより、同じ路上の不安定な活動であっても、グローバル経済に直接的にアクセスすることになった。この状況は彼らにとってオルタナティブな人生の可能性をもたらすと、筆者はやや楽観的に指摘してきた（森本 2000a；b；Morimoto 2002）。しかしながら、現実問題としてアメリカでの同時多発テロ事件や SARS が彼らの生活に影響を及ぼすようになったように、もっと大きな世界システムの中心—周辺連関の周辺に、自ら、しっかりと組み込まれる過程であったことをここで指摘しなければならない。

これまで記述してきたように、彼らはアイルランドに渡ってネパールでは考えられないような大きな経済機会を手にし、かつては考えられなかったような成功を手にしつつある。他のラフレと同じように、やがてカトマンドウに家を建て、そこで暮らすことが実現可能な範囲で予想されている。観光客の来た道を逆に辿り返す過程で、アイルランドで周縁化された安価な外国人労働者として

働き、グローバル化の作用をより直に受けて限られた選択肢の中での生活をネパールよりはましだといって受容する。他方で、彼らの故郷である村は、望郷の対象でありつづけるであろうが、彼らの戻るべき場所から更に一層遠のいていくことになるのだろう。

謝辞

本小論に登場する二人のガンダルバをはじめ、筆者の調査やネパール滞在を支えてくださったガンダルバ諸氏に心より御礼申し上げます。なお、本小論の骨子は Britain-Nepal Academic Council 開催の研究集会において報告した内容がもとになっている (Izumi MORIMOTO, The Impact of Global Tourism on the Gandharbas of Thamel, Nepal Study Day, at SOAS, University of London, 17, March, 2006)。参加者の方々から頂いた有益なコメントに感謝したい。

注

- 1) ガネシュは次兄クリシュナ (仮名) と 2000 年からアイルランドに出稼ぎに来ている。
- 2) ネパールの食事は地域差があるので一般化できないが、ガネシュのネパールでの日常食は、長粒米の米飯に生姜や香辛料、塩で味付けした緑豆等の豆汁をかけ、おかずとして鶏肉や水牛、ヤギの肉を香辛料で炒め煮したもの、ジャガイモやカリフラワー等野菜を香辛料で炒め煮したもの、それにトマト等の漬物を添えたダル・バート *daal bhat* と呼ばれるものである。但し、ガネシュの村では肉を日常的に食することはなく、祭りで動物を神に捧げた時など、特別な時にご馳走として出されることが多い。
- 3) ダサインはネパールのヒンドゥーにとって一年の中で最も重要な祭りで、10 月頃に行われる。ダサインの祝い方は地域差やカースト、民族による文化的差異が大きい。ガネシュの属するガンダルバ *Gandharba* カーストの場合、高位カーストに比べて肉食は文化的社会的に自由であるため、水牛や鶏やギ、豚等を神に生贄として捧げて宗教的な儀礼 (プジャ *puuja*) を行うことが多い。ここでダサインの思い出として語られた鶏や肉は、このような彼の文化的背景を示すものである。
- 4) カーストや家系、宗教、文化、居住地等の観点から区分されるネパールの社会範疇を意味する。近年ではジャーティ *jaati* という呼び方もなされる。
- 5) 四弦の弓奏楽器であるサランギ *saarangi* を携え、村々を歩き、弾き語りすることがガンダルバの生業とみなされてきた。
- 6) 一般にはガイネ *Gaine* と認識され、センサスにもそのように分類されるが、ガネシュをはじめとしたガンダルバたちは、侮蔑的なニュアンスを含む呼称であるガイネを名乗ることを避ける。したがって、本稿では彼らが自称するガンダルバを用いる。綴りは正確には *Gandharva* であるが、本小論では同様の理由で *Gandharba* を用いる。この経緯については森本 (2000b) で論じている。
- 7) 2001 年センサスによる。12 番目に高い比率を示している。実際には都市への出稼ぎ者が増加しているため、更に多くのガンダルバが都市で生活しているものと考えられる。
- 8) とりわけ外国人研究者のロマン主義的なまなざしがヒマラヤに向けられてきた為であり、その結果研究対象とされてきた山地の人々に関わる人々としてヒンドゥー高位カーストたちのネガティブなイメージが形成されてきたという (Sharma 1997: 491-492)。
- 9) ネパリとは、ガンダルバと同じようにガイネを避けて用いられる彼らの自称の一つである。
- 10) 実際にはインドに労働者として出稼ぎに行ったり、ネパール人の集住するダーズリンなどに弾き語りに行ったりするケースがあったので、正確にはインド以外の外国への出稼ぎを意味する。
- 11) この当時、タメルに拠点を置くガンダルバの協会 *Gandharba Culture and Art Organization* に 45 人が登録していた。インフォーマルな活動であることから流動が激しく全体の把握は困難であるが、そのうちの比較的長く活動していた 30 人に対して聞き取り調査を実施した (詳しくは

Morimoto 2002).

- 12) 実際には統計を取られていない陸路による移動が多いため、インドへの渡航者が最多を占める。
- 13) 国境を越えてインドに出かけても、出稼ぎ中のネパール人や、ダージリンのネパール人を対象に、ネパール語で歌っていた。
- 14) 弟。または自分より年少の男子に対する親愛を込めた呼びかけの言葉。
- 15) 1980年の時点で、1ネパール・ルピー当たり日本円で約0.05円であった。
- 16) 村から見たらカトマンドゥは都会であるが、その当時のカトマンドゥのバスパークは市街地から外れていた。多くの人が集まって賑やかな場所を都会 *sahar* と表現している。
- 17) 姉。または自分よりも年上と思われる女性への呼称。
- 18) 男女が歌を掛け合い、相互に応答しあう形式で歌う。
- 19) この傾向はクリシュナやガネシュに限らず、1990年代半ばまでにタメルに出稼ぎに来た多くのガンダルバについて言える。
- 20) 今でも一般に村では下位カーストの人が調理した食べ物（特に水を用いるもの）をヒンドゥー高位カーストの人々は口にしないが、匿名性の高い都市においては調理者のジャートはもとより、どのような調理をしているのかも確認できない為、その状況は変化しつつあると考えられる。
- 21) 傭兵としてインドの軍隊に入ったネパール男性のことをラフレと呼んでいたが、転じて今日では外国に出稼ぎに行く男性をラフレと呼ぶようになった。
- 22) ネパールにいた時から具合が悪くなると薬局で処方された抗生物質などの薬を服用しており、アイルランドに行き初めて近代医療に接したわけではない。しかしながら、アイルランドで近代医療を全面的に受け入れているわけでもない。このような心身の不調、乃至病気に対する認識や対応の変化については別稿で論じたい。
- 23) アイルランド音楽とのフュージョンといえるだろうが、グローバル化や商業主義の中でネパール国内の音楽事情も変わりつつあり、ジャズとのフュージョンや、エスニック・ミュージック

としてのネパール音楽の中に他の民族楽器と共にサランギが演奏されるようになっている。このようなサランギを含めたネパールにおける音楽の変化については現在調査中であり、別稿で論じたい。

- 24) 実際に外国人観光客数が減ってから、時々村を歩いてサランギを弾き語るようになったタメルのガンダルバたちもいる。

引用文献

- 松田 素二 1996.『都市を飼いならす アフリカの都市人類学』河出書房新社.
- 南 真木人 1997.「ビカス」をめぐる。石井溥編『暮らしがわかるアジア読本 ネパール』316-321. 河出書房新社.
- 森本 泉 2000a. 旅の吟遊詩人から「出稼ぎ者」へ—ネパールの楽師カースト ガンダルバの国際ツーリズムへの包摂. 旅の文化研究所 研究報告 9: 161-171.
- 森本 泉 2000b. ネパール地域像の再構築—楽士カースト集団ガンダルバの表象と実践. 熊谷圭知・西川大二郎編『第三世界を描く地誌 ローカルからグローバルへ』131-148. 古今書院.
- Chhetri, Gyanu, 1989. Gaineke Sarangi euta magne bhado ki Nepali Samskritiko Amga? Eka Samajasastriya Drstikon (in Nepali), (ガイネのサランギは物乞いの道具か、それともネパールの文化か?) *Contributions to Nepalese Studies* 16-1:55-69.
- Hitchcock, John T. 1975. Minstrelsy, a unique and changing pattern of family subsistence in West Central Nepal. In *Explorations in the Family and Other Essays*. ed. Dharendra Narain. 305-323. Bombay: Thacker & Co., LTD.
- Höfer, András. 1979. *The Caste Hierarchy and the State in Nepal: A Study of the Muluki Ain of 1854*. Innsbruck: Universitätsverlag Wagner.
- Macdonald, Alexander W. 1975a. The healer in the Nepalese world. In *Essays on the ethnology of Nepal and South Asia*, ed. Alexander W. Macdonald, 113-128. Kathmandu: Ratna Pustak Bhandar.
- Macdonald, Alexander W. 1975b. The Gaine of Nepal. In *Essays on the ethnology of Nepal and South Asia*, ed. Alexander W. Macdonald. 169-174. Kathmandu:

- Ratna Pustak Bhandar.
Ministry of Culture, Tourism and Civil Aviation. 2006.
Nepal Tourism Statistics 2005. Government of Nepal
Ministry of Culture, Tourism and Civil Aviation.
- Morimoto, Izumi. 2002. Adaptation of the Gandharbas to
growing international tourism in Nepal. *Journal of the
Japanese Association for South Asian Studies* 14: 68-91.
- Morimoto, Izumi. 2007. The development of local
entrepreneurship: A case study of a tourist area,
Thamel in Kathmandu. In *Nepalis Inside and Outside
Nepal: Political and Social Transformations*, eds. Ishii,
Gellner and Nawa. 351-382. Delhi: Manohar.
- Nepali, Purna. 2003. *Gandharva Saarangita ra Sanskriti*, (in
Nepali), (गन्धर्वा सारंगीと文化)
Sanyukta Raastriya Saiksika Baighyanik tatha
Saanskritika Sanstha, Kathmadu: UNESCO Office
Kathmandu.
- Sharma, Beena. 2003. *Continuity and change among the
Gandharva community in Kathmandu*. A dissertation
submitted to the Faculty of Humanities and
Social Sciences Central Department of Sociology/
Anthropology for the Partial Fulfilment of the
Requirements of Master's Degree in Anthropology,
Tribhuvan University.
- Sharma, Prayag Raj 1997. Nation-building, multi-
ethnicity, and the Hindu state. In *Nationalism and
Ethnicity in a Hindu Kingdom the Politics of Culture
in Contemporary Nepal*, eds. D.N. Gellner, J. Pfaff-
Czarnecka and J. Whelpton. 471-493. Amsterdam:
Harwood Academic Publishers.
- Weisethaunet, Hans. 1997. 'My music is my life': The
identification of style and performance in Gaine
music. *European Bulletin of Himalayan Research* 12-
13:136-151.
- Weisethaunet, Hans. 1998. *The Performance of Everyday
Life The Gaine of Nepal*. Oslo:Scandinavian University
Press.

資料

音楽 CD *Gandharba & the Roadside All-Stars*

もりもと・いずみ
明治学院大学国際学部

Trace the Tourists' Track back to Ireland: A Case of Nepalese Migrant Workers, the Gandharbas

MORIMOTO Izumi (Faculty of International Studies, Meiji Gakuin University)